



TITLE:

書評本山美彦『貿易論序説』

AUTHOR(S):

杉本, 昭七

---

CITATION:

杉本, 昭七. 書評本山美彦『貿易論序説』. 經濟論叢 1983, 132(1-2): 134-139

ISSUE DATE:

1983-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/133989>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 132 卷 第 1・2 号

---

経営と家族 (1).....	渡 瀬 浩	1
いわゆる「植民地物産」について (1).....	渡 辺 尚	22
戦後ソ連の工業化と企業組織.....	溝 端 佐登史	48
日本帝国主義形成期における東北開発 構想 (下) .....	岡 田 知 弘	71
日本工作機械工業の技術発展の統計的分析.....	小 林 正 人	88
戦時金融統制と日本興業銀行.....	西 村 貢	110
 <b>書 評</b>		
本山美彦『貿易論序説』.....	杉 本 昭 七	134

経済学会記事

---

昭和 58 年 7・8 月

京 都 大 学 經 済 學 會

# 本山美彦『貿易論序説』

杉 本 昭 七

本山美彦氏は精力的な研究で近年注目されている気鋭の経済学者の一人である。そのことは本書公刊後、多くの書評がただちに相ついであらわれた<sup>1)</sup> 一事からもうかがい知ることができる。

本書の構成は次の通りである。「歴史意識の危機と経済学」(1章)、「マルクスと世界市場」(2章)、「複合的世界市場と世界労働」(3章)、「周辺部構成体と労働力の再生産」(4章)、「農工間国際分業と低賃金労働力」(5章)、「交易条件論」(6章)、「国際価値論の反省」(7章)、「貿易利潤論」(8章)、「国際価値論と均衡化過程」(9章)、「不等価交換論と生産価格論」(10章)、「世界市場の型」(11章)、「相互依存下の国際経済」(12章)。

これらの章配列からも判るように、氏はマルクス経済学的接近による世界市場論(貿易論)の領域で、これまでの業績をのりこえようと意図している。マルクスによる経済学批判体系プランの後半部分(国家——外国貿易——世界市場)、とりわけ「外国貿易」と「世界市場」範疇の理解の仕方について独自の主張——「複合性」の強調をおこない、「低賃金労働力が世界経済に包摂されている態様」(はしがき)を理解する理論的視座を確定——国際価値論の再検討とその生産価格論への具体化——するという方向によってである。

評者は、本山氏と同じようにマルクス経済学を基礎におきながらも、ここ10年以上現代世界経済の構造分析という、理論の抽象度も対象も氏とは異なる領域で研究を続けてきている。だから本書について意見を述べるのは相応しくないのだが、他方私も1960年代半ばまで同様の研究領域で悪戦苦闘した経験があり、一世代若い研究者がどのように多くの理論的障壁を現在克服しているのかに充分な関心があることも事実である。

1) 本多健吉「経済学雑誌」第83巻第6号、柳田侃「書斎の窓」83年4月、平川均「クライシス」83年春、植松忠博「世界経済評論」83年3月、前田芳人「日本読書新聞」83年3月21日。

この小論は、本書の全般について、あるいは主要な構成部分について論じるものではない。それらは他の書評ですでに論じられてもおり、また提起された多くの論点は、今後論争の中で重要な位置を徐々に占めてゆく性格のものであるからである。だからここでは評者の関心にひきつけて本書の枠組にあたる部分に2つの疑問を投げかけることだけに課題を限定したい。その意味でこの拙文は本書のもつ学問的価値全体を公平に論評する態をなしていない。あらかじめ著者と読者の了解を得ておきたい。

### I 本書の課題限定について

評者が現代世界経済の構造に主たる関心をおくようになった経緯には、本書で対象とされているマルクス経済学に伝統的な問題領域を研究することについて、一定の方法論上の疑念が生じたことが大きく関与している。

その方法論上の疑念とは、第1にマルクスの「プラン」における「外国貿易」ならびに「世界市場」で明らかにされるのはあくまで19世紀における外国貿易・世界市場の現実であり、現代にそのままつながるものではない<sup>2)</sup>、という私の「プラン」理解。その上で第2に、商品・貨幣関係を分析の主対象とする「外国貿易」ならびに「世界市場」で解明される内実は、対外投資の増大する独占資本主義段階<sup>3)</sup>には、まして多国籍企業による対外直接投資を「世界経済」の重大な特質とする現代には、独立して分析されることの意義を著しく減殺されてしまっているのではないかということであった。

ここで本書の課題限定に関する論点が浮上する。『貿易論序説』という書名および国際価値論が論述の核をなしているところから判断すると、ここでの主課題は労働力の価値規定と貿易をめぐるものといってよい。いいかえると「資本主義貿易の本質＝国際的搾取」を国際価値論<sup>4)</sup>の検討によって行なったという性格のものである。だが本山氏には他方でそれ自体極めて当然のことだが、現在の第三世界諸国の状況に至る歴史的に貫通する論理を求める熱い志向が存在しているように思われる。そうだとすると、価値論という本質規定に属する抽象的論理を歴史的に用いた場合に第三世界の問題解明も抽象的にしか論じえないのではないかとの疑問が生じよう。たとえば価格論レベルで展開され

2) 拙著『現代帝国主義の理論』補論I、青木書店、1968年。

3) 吉信典「貿易論の前提としての国家」吉信編『貿易論を学ぶ』有斐閣、1982年 60～61ページ。

4) 同上はしがき 2ページ。

でも歴史貫通的視点との間に存在する乖離は同質のものであろう。

上述の論点は系として生じる次の疑問につながる。もし歴史的視点を包摂しようとし、とくに現代にまで埋論的含意を敷衍するならば、氏自身も幾つかの箇所での重要性を指摘されている<sup>5)</sup>ように、海外投資との関係で貿易論を構築することが不可避となっていて、貿易論による接近で現代の国際経済現象を分析する意義は限られたものになってこざるをえない。私には今のところ国際価値論にかかわる論議を吉信庸氏の位置づけのように国際的搾取を明らかにするという役割に封じこめておいた方がよいように思われる。たとえ世界的規模で世界の労働力を利用する多国籍企業にかかわらしめて論議する場合を想定しても同じことがいえそうである。

## II いわゆる「世界市場の複合的把握について」

氏は、マルクス研究者に多くみられるという「単線的発展史観」を批判し、世界市場の複合的把握が必要なことを強調している。これは、氏の主張の重要な柱をなしている。

私が国際経済学分野の学者のマルクス「プラン」後半部分の理解に対して基本的なところで疑念を表明したのは1966年であった<sup>6)</sup>。そしてそこでは、概念を抽象的なものからより具体的なものに単線的に、しかも演繹法で上向させる観念的接近を批判しており、「国家」「外国貿易」「世界市場」各範疇はそれ自体としての表象を前提として分析的に取扱うことを主張しておいた。だが評者はそこにとどまっていた。

「世界市場」では異質性の存在が前提としてあり、当然異質性が分析の対象とされなければならないという氏の主張は、従来この領域での議論に一つの新鮮な衝撃を与えたことは確かである。特に既に決着がついている筈の上向的プラン理解が未だに跡を絶たない現状においてはその主張は必要なことでもある。氏の「プラン」の方法理解は以下のように要約されている。「マルクスの『叙述プラン』は決して直線的な上向を意図していたものではなく、三層の円環状を形成するものであった。『資本一般』の中で小循環が第1の層をなしている。資本はこの小循環の中でも十分に全体的規定を受ける。しかしこの規定は他の審級（国家）との gliederung という相互規定の中循環によってさ

5) 例えば123ページの注(20)には次のように記されている。「資本輸出とのからみにおいてのみ、外国貿易論が展開されるべきであることを明示した先駆的業績がすでに1929年に出ている。私たちは、このJ・H・ウィリアムズの意義を長らく放置しすぎていた。」

6) 前出、注(2)。

らに豊富化される。さらに、過程の論理が導入されて、資本の外部にあるものを資本が内部化して行く象徴的場である世界市場までも巻き込む大循環によって、より現実化された全体性を浮き上げることができる。そこでは、資本制的生産様式が生み出した上部構造が外部の社会構成体を自己に包摂する論理とともに、ブルジョア社会自体に反作用的に働く爆破力に注意が集中させられるのである<sup>7)</sup>

いうまでもなくここでの「大循環」が氏の関心であり、異質性の位置づけも（その存在自体と起爆地）そこにかかわっている。「資本一般」の論理レベル、「国家」との関連での論理レベル、「世界市場」レベルにわけ、各論理レベルで新たに投入した基本範疇に視座を据えて、対象を分析し規定し直して行くことを強調する氏の姿勢には同意できるものがある。その上、氏が「プラン」前半の「資本一般」につづく「土地所有」と「賃労働」についても同様の思考で接近しようとしているところは興味深いところである<sup>8)</sup>。

だが、係争点はここから先にある。世界市場の複合性を論じつつけている他の秀れた研究者がいる。吉信肅氏は世界市場に存在する国家を、Ⅰ資本主義国家、Ⅱ民族国家、Ⅲ半植民地の3つの型にわけ、次のような説明を加えている。「Ⅲは1国の歴史的順序でいえば前資本主義生産様式の国家ということになるが、資本主義世界市場の条件下では、原則的・端初的にⅠあるいはⅡの支配下におかれ、その地の住民は自決権を部分的もしくは全面的に奪われた状態にある。だが、それにもかかわらず、ここでそれを国家型の一つとして考えているのは、そこにおいてやがて民族解放運動が活発化し、民族国家が形成されるという歴史的必然性の観点を重視するからである。……レーニンは、ブルジョア民主主義的民族運動の見地から、より明示的にそれを国家型の一つとして取り扱った。機械制大工業による産業資本の確立は、はじめてこの3つの国家型を世界的に発生させた。……資本主義生産様式が支配する諸国家間の関係を考える場合、よくあるようにⅠ相互間の関係にのみ限定するとすれば、それは世界市場の多面的な諸関係を見失ってしまう結果になろう。資本主義国家だけからなる世界市場を想定することは、たとえそれらの間での発展の不均等を考慮に入れたとしても、資本主義世界市場からの抽象にすぎないのである<sup>9)</sup>。」長く引用したのは他でもない。ここでの文章の中に、世界

7) 本山美彦『貿易論序説』40ページ。

8) 例えば同上41ページ。

市場の複合的把握につながる世界市場における国家の複合的把握の強調があるからであり、さらにその複合の内実が3つの国家型として明確に規定されているからである。

評者には吉信氏の考え方は興味深い別の論点につながっているように思われる。それは「プラン」における「土地所有」「賃労働」の研究方法和対象をどのようにとらえるべきか、ということに関係してくる。本山氏はこれらの範疇を「対目的に考察する」マルクスの方法は、「ブルジョアの制約そのものをつき抜けるこれら要素が否定的自立者に転化する論理を叙述することにあつた」<sup>10)</sup>として論理の性格に論及しているが、吉信氏の場合にはその国家に関する論理を前提にすれば、国家に先立つ「プラン」前半の展開の中心軸は、資本の運動法則が土地所有に作用し賃労働者を生じさせるその各国の具体的な歴史の中から、三大階級の諸関係の類型を析出することにあつたという内実まで照射することになるように思われるからである。評者は、「プラン」論争に深入りするつもりはないが、これまで「土地所有」「賃労働」範疇に含まるべき内容について論議が欠落していた原因の一つは、無意識のうちに研究者が抽象度の高い事柄を想定していたことにあるのかも知れない。吉信氏の国家三類型論はそこから逆に、「土地所有」「賃労働」両論に包摂さるべき理論枠に示唆を与えてくれている<sup>11)</sup>。

このように考えると本山氏のいう世界市場の複合的構造の内容は、吉信氏によって性格を規定され把握されているとはいえないだろう。

両氏の複合性理解の相違は、国家の把握における相違を別にすれば、吉信氏が先に見たⅢ→Ⅱ→Ⅰへの歴史的必然性を重視しているのに対して、本山氏の力点は、この必然性に疑問を提示していることに求められることになる。本山氏の場合、第三世界が資本主義的作用の下でそこに包摂され資本主義化してゆきながらも、その方向は貫徹されず、非資本制的ウクライナは第三世界で依然再生産され、そこから低賃金構造も世界市場での複合構造もたえず産出されるというのであるが、評者にはこの論点は、どの程度の長期展望で経済法則を論じるかにかかわることのように思われる。そして一言つけ加えるならば、第3世界の将来展望にとって現在重要な論点は、資本主義の従属の深まりか、資本主義的自立化の進展か、あるいは相互依存関係の発展か、という接近ではなく、歴

9) 吉信、前掲書58-59ページ。

10) 本山、前掲書37ページ。

11) このようなとらえ方をはじめに示唆されたのは、高知大学の西野勉氏であった。

史上新たに生じた従属的相互依存構造の存在であり、それを脱却するにあたっての途上国の先進資本主義国とのせめぎあいの動向にあるように思われてならない。